
バジリコ×バジル

まごひげ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バジリコ×バジル

【Nコード】

N9219E

【作者名】

まごひげ

【あらすじ】

そこは、終わったはずのモノがまだ始まったばかりの世界空は鈍く雨が絶えず降りゴミのように散ってゆくー僕たちはこの世界からの大脱出を決めたんだ。

工場にて（前書き）

アドバイス下さい
感想でもいいです

工場にて

くもりというには雲が少なく、はれと言つには雲が多い
半端な空・・・。

灰色で縁取られた四角い空

ここは、どこか現実の世界の奥の奥。
もしかしたらもっと奥かもしれない
古びた造船工場・・・。

錆びたトタン壁にポツリポツリとしずくが落ち始めた頃
「雨降ってきた！急いで！！」

屋根の上に居る少年に、長い黒髪をおさげにした少女は
朽ちた梯子を持ちながら周りを伺った。

「だってまだ終わってないって・・・」
少年は、釘をくわえながら下にいる少女に言った。
冷たい追い打ちは次第に大粒の雨となり少年の作業を遅らせた。

ガンガンガンガン・・・
トタンに釘を打ち付ける作業は単純だが逆に飽きやすいのが
現実だった。

大粒の雨は風と混ざり更に追い討ちをかけてくる。

「なんでこんなことになったんだっけ！？。」

少年は絶やすことなく釘を打ち付けた。

「もとを言えば全部あんたが悪いのよ!!」
雨は少女の服を殴り黒髪をえぐった。

赤と蒼と翠と灰色の空と風景の時間。
事件は起こった。

「スイマセン、」

時計の針は午前10時を指していた。

「完全集合は午前8時のはずだぞ」

大きな男は腕組みをして少年をにらみつけていた。

男の後ろでは少年と同じぐらいの子供がせつせと持ち場の作業を
こなしながらもクスクス・・・と笑い声が絶えなかった。

「1156号!聞いているのか?!」

大きな怒鳴り声がトタン造りの工場全体に広がった

「君の代わりなんざいくらでもいるんだぞ!!」

時間に遅れることは、死罪に匹敵する」

「ハイ。」

少年は一生名前で呼ばれることはない。

それは死んでもこれからも・・・。

一人の人として認められていない。

【モノ】として一種の道具として扱われる。

「さあ行くぞ1156号」

男は少年の細い手首を握り歩きだした。

継ぎ接ぎだらけの鈍色の床。
少年の視線の先の向こう
赤い服を着た少女が一人。

「待つてください」

声は震えていたがその声は透き通るようにキレイで
まっすぐに聞こえた。

「なんだね？1201号」

沈黙が続いたのち少女は重い口を開いた。

「死罪はあんまりだと思います。それに毎日毎日、朝早くから
夜遅くまで働いているのだから遅刻だってします！」
少女は紅い眼に涙を浮かべながら男に訴えた。

「1201号私に口答えする気か？君も死罪だ！」

男は少女に近寄る。

静まり返る工場内。

屋根裏の扇風機だけが相変わらずカタカタと陽気に回っていた。

「おーい！ここの屋根がめくれておるよ誰か
直してはくれまいかな」

工場の向こうからかすれた声のおじいさんの声が聞こえた。

姿は見えない。

音声だけの声だった。

空はゴロゴロと喉を鳴らし闇色の雲が辺りを覆った。

「はっはい！長官、こいつらがやります。少々お待ちを」
男は大きいくせにペコリとお辞儀すると少年と少女の背中

を押してこう言った。

「命拾いしたなクスども・・・」

2人は黙って歩きだした。

工場の外に出たとたん少年は視線を合わさずに少女に言った。

「あれ、魔法だろう？」

冷たい風が頬を滑った。

「そうだけどそうじゃないわ」

蒼い草を踏みながら行く先はもちろん壊れた屋根。

「嘘じゃないのか？」

「嘘だけど嘘じゃないわ」

朽ちた梯子を屋根に立てかけ少年を促す

少年は不思議そうに梯子を上がっていく。

そこには、さっきおじいさんが言っていたように本当にトタンがめくれていた。

「デタラメ言っていたんじゃないのか。」

トタンの上は足場が悪くめくれたトタンは風化によるものだった。

この下はさっきの子供たちが作業をこなしている。

戦争。

魚雷。

造るために。

そして何より勝つために。

トタン屋根の割れた隙間からもれる黒い煙とホコリ、熱風は子供たちの働く環境を物語っていた。

「ちょっと！早く修理しなさいよ！見つかるよッ！」
大きい声だけど小さい声で言った。

「ういゝ」

少年は錆びた釘を口にくわえてトンカチを片手に屋根直しをし始めた。

「おおゝ君たちは良く私がしてほしかったことが分かったな！」
さっきのおじいさんの声だ。

屋根の下。
かすれた声。

「光荣です。長官、私たちは時間に遅れた罰を受けている
までです」

少女はひざまづいて頭を下げる。

「また1156号か・・・」

溜息をつくおじいさん。いや長官と言った方が良さだろうか。

後書き

上手くかけないけれど私のオリジナル作品の第一作です。
バジルコ×バジルを読んで下さった方は
これからのアドバイスや感想をお願いします。

ある時代の物語

その日は、偉く蒸し暑い頃からか雲もドンよりしていた。

そんなめんどくさい昼下がり

全国の奥様はお昼のワイドショーを横になりながら見ている時間帯だろうか

四角い視界を横切るようにお世辞にも綺麗とは言えない禿げた墨色の飛行機が5、6台

飛ぶのが見えた。

何となくぼんやりしていた。

2畳半ほどの個室の中には麻袋が2枚ほど置いてあった。まるでこれで寝ると言っているかのように

ステンレスの粗末なボウルにはフランスパンが3枚、4枚目は食べかけた

無論、彼はあの後死罪は免れたものの牢屋行きとなったのだった。そして、彼が考えることはただ一つ

「2時までにはここからでないと午後の仕事に間に合わなくなってしまう」

逃げる事だった。

平和が確立した世界で何故戦争をするのだろうか

それは、平和を維持し人類の戦意によるボルテージを下げるために戦争をする

すれば戦意が下がりまた平和が訪れる。平和が来ると不満が高まる。

で、戦争する。

抑制と均衡の関係とはまさにこのことであろう。

この抑制と均衡の関係は天秤がピタリと止まるように釣り合いがとれていなければ
そのバランスが崩れぐちゃぐちゃになってしまう。

そのことで最近まで国の大統領や国会議員らが混じって話し合った結果、こんな
法律が新しく生み出された。

【平和維持バジリコ抑制均衡法】
と言うモノだった。

内容はさっき言ったように平和と戦争のバランスを取るための法律だ。

片方の国は翠豊かな山々が在り一面の青い空が一日の始まりを告げるが、しかもう片方の国は片方の国の平和のバランスを取るために戦い
続けねばならないんだ。

あまりにも不公平なこの法律は国民には何の承諾も得ず執行されたのだった。

過去に人間と魔法使いとの戦争が繰り広げられた頃、最先端のテク
ノロジーと技術をふんだんに用いた人間はみごとな戦術で魔法使いに勝った。

【平和維持バジリコ抑制均衡法】が出来たのはそれからずっと後の事だったが

戦争に勝った人間は魔法使いを道具のように扱うようになった。
そんな昔からの概念が根づいたのだろうか戦争をし続ける国は魔法

使いの国（魔界）になった。

そして法律の名前の影響からか、戦争をし続けるかわいそうな国、
誰もが バジリコ
と呼ぶようになったのだ。

戦争をするのは決まって魔法使いで（魔界戦争）人間は指揮を取り
今朝寝坊した少年を叱った大男も人間で逆を言うと言つと造船工
場で働いていた子供たちは
マジックチルドレン
皆魔法使いの子で

誰もが貧しくいつも腹を空かせていた。

ついでに言うとならには、名前が無く番号で呼ばれるようになった
のも法律が出来てからのことだった。

法律ができる前はチャンとしたナマエがあった。

だが、この世界になってからナマエを使えなくなった。すべて番号

「おい、2時からの作業の時間だ。出る」

朝見た大男が鉄の輪に通してある鍵の一つを取り出してガシャツと
大きな音をたてながら

牢屋を開けた。

少年は無言で出口を潜ると男は鍵をかけ直して歩き出した。

暗い石畳を歩くとコツンコツンと音がする。その場の沈黙を消して
くれるような

その場のBGMだった。

短い階段を上がると眩しい太陽の光ではなくどんよりした雲が出迎
えてくれた。

上まで上がりきると男は歩くスピードを速めて少年を引き離れた。

「ここまで来れば工場まで一人で行けるだろう。もう君も何百年と魔界にいるのだから

そろそろこの生活にも慣れてもらわなきゃ困るぞ」

「・・・・・・・・ハイ」

魔法使いは年を取らない

と言っても人生のどこらへんで止めるかは自分で決めることが出来る。

20歳がいいならば20で止めれるし、おばあちゃんになってからだって止められる

時間が止まるのは自分の身体であって外の世界の時間はそのまま

時間が止まっても外部からの損傷には考慮せず

死ぬことだってありえる

ここで働く子供は時間を止めている。

労働者として

反対側の世界の平和を維持する為だけに・・・・・・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9219e/>

バジリコ×バジル

2010年10月22日00時07分発行